

保育形態と幼稚園の生活 その2

天 野 珠 子

Teaching Styles and Daily Living at Kindergartens No.2

Tamako AMANO

I はじめに

平成2年に大幅に改訂された幼稚園教育要領は、約束通り10年後の見直しが行われ、平成12年4月より新要領が実施された。今回の改訂は平成2年の改訂のような大きな変更はないが、時代の要請を受け、一部見直しが行われている。

平成10年6月、前改訂後における現場の変化を探るため幼稚園の保育形態の実態調査を行ったが¹⁾3年経った現在、更に保育形態や保育内容に変化が現れたかどうか、を探ることにした。

II 平成2年の幼稚園教育要領改訂後における幼稚園の動向

前要領の改訂の目玉は「環境を通して行う教育」であった。そのため豊かな環境を準備して、そこで子どもたちが思いっきり遊ぶことを強く打ち出していた。「遊び込む」保育の奨励である。教師（保育者）は、といえは、「援助者」「助言者」の立場から見守ることや励ますことが重視され、引っ張る保育は否定されたのである。

この意図については、昭和59年秋に文部省幼稚園教育要領に関する調査研究協力者会議が実施した「幼稚園教育に関する実態調査」（全幼稚園の約5%に当たる800園対象）で、「間接情報のみで、生の体験に乏しい幼児」「自発的に遊べない幼児」の増加などの問題が指摘されたこと、また別の調査では、思春期に問題行動を起こした青少年の生育暦を調べると、幼児期に母親の育児態度に問題があったと考えられる場合と並んで、自己表現の足りなかった子どもの場合が多数を占めていたという結果による。この結果を受け、上記協力者会議の検討によれば、

「このような環境の変化に脅かされつつ、幼児の発達の基本的な過程は変わるところがない。すなわち幼児の身体的発達、社会的発達、感情の発達、知的発達は互いに密接に絡み合っており、環境と関わる力、創造力、意欲など将来にわたる発達の基礎は、幼児の生活に自然な流れに即した豊かな直接体験を通して培われる。そのためには、幼児が安定し自由にのびのびと活動できる場があることが不可欠である。」²⁾と結論づけたのである。そして「幼児はこのような環境の下で、自発的・主体的に環境に関わりを持つ力、積極的に物事に取り組む意欲・態度等を身に付けることができる。幼児期にこれらが十分に育てられることによってのみ、生涯を通じて人間としての健全な発達や、環境の変化に柔軟に対応してよりよい環境を創造していく力の基礎を培うことができるのである。」³⁾と解説している。

以上のような捉え方は、現代の発達観からいって当然のことであり、その意図に添った保育内容の展開が期待されたのである。ところが現場の捉え方は、短絡的に遊び時間の増加という解決法に流れた。遊び時間が多くなれば、遊ぶための環境のより充実が望まれる。前回の調査（平成10年）によれば、自由時間の子ども達の遊びは、確かに一時代以前の園庭での自由遊びを中心としたものから保育室内の自由遊び（折り紙、粘土、お絵描き）などの増加につながっていた。⁴⁾しかし「遊び」の定義がなされず、単に時間と空間を広げ、従来と同じような市販の教具・教材を単に多くしたのみでは、前記の協力者会議の意図した結果を期待することは当初から無理があったのである。遊び、遊びと強調したため、保育時間のほとんどを

自由時間が占め、しつけや知的、情操的保育は計画的には全く与えられない極端な一部の幼稚園も出現した。反対に「遊び保育」に疑問を感じ、さらに保護者の不満を配慮して改訂以前の保育を継承する園も多かったのである。⁵⁾

III 今回（平成12年度）改訂の幼稚園教育要領の趣旨と本研究の動機

今回改訂の目玉は「生きる力を育む教育」である。（学習指導要領も同じ）勿論「環境による教育」「援助者としての教師」の大前提は変わらず、幼児の主体性の尊重は遵守されている。ただ、放任的遊びに流された現場の保育への反省から、「保育者側の計画的環境構成」や、「幼児期における本来の意味における知的発達」を促すことが付加された。具体的には、「文字」や「数量・法則・標識」などが、取り上げられ文章化されたのである。

さて、これに対して幼稚園現場はどのように理解し、カリキュラムを構成しているのだろうか。今までタブーとして表面上は取り上げにくかった文字指導や数量計算が公然と解禁されたのである。教育要領の意図を十分把握しないで枝葉部分のみ捉えれば、小学校教育を単に先取りした知育主義教育となる危険をはらんでいるといえる。

以上のような状況を踏まえ、改訂直後の実態調査を実施することにした。

IV 調査目的

1. 平成10年の調査後、上述の通り幼稚園教育要領が改訂された（平成12年4月より実施）ため、改訂直後の実態を、前回の調査に準じて実施し、以後の変化を探り比較・検討する。
2. 今回、特に教育要領において、遊びに関して計画的環境構成が追加されたが、物的環境のみならず人的環境としての保育者が、子どもの活動に対してどのように関わっているのか、新しい取り組みや、保育者の積極的アプローチはあるのか、について調査する。
3. パソコンの導入や、外国語の小学校教育への導入時期を間近に控え、従来から比較的多かった体育や造形指導の外部講師（非常勤）に加え、時代の要請に応える外部講師が増加したのではないかと、という仮定の下、その実態を探る。

4. 一週間のタイムスケジュールの事例から特徴ある園を幾つか選び、その保育形態と保育内容を考察する。

以上のように刻々と変化する幼稚園の変化の過程を調査・検証する。

V 調査方法

- ・調査期間 平成13年6月第2週または第3週の一週間の平常保育
- ・調査資料 駒沢女子短期大学保育科2年生の幼稚園実習日誌および当該学生へのアンケート調査（今回は学生自身に、平常保育の一週間を日誌より抽出し各自に記入してもらった。また前回の調査で一週間の時間割には、あまり学年による差のないことが判ったため、学年は指定しなかった。）
なお比較のため平成10年の結果を { } 内に記す。

- ・資料数 81部（アンケート回収数）{120部}
- ・園数 70園 {81園}（公立園…7園 {6園}、私立園…63園 {75園}）
（資料数と園数が一致しないのは、2名実習した園が11園あったためである。）

- ・実習地域…13県 {11県}

内訳

東京都……28園	山梨県……3園	愛知県……1園
神奈川県……18園	福島県……2園	愛媛県……1園
静岡県……4園	長野県……2園	秋田県……1園
千葉県……4園	新潟県……2園	
埼玉県……3園	茨城県……1園	

- ・調査資料
 - (1) 平成10年作成の一週間のタイム・スケジュール記入用紙に同じ⁶⁾
 - (2) 保育内容に関するアンケート調査（順次調査結果の項参照）

VI 調査結果（平成10年との比較）

1. 一日の保育時間について
 - ・登園時間（図1）
 - ・降園時間（図2）
 - ・保育時間（昼食ありの日の平均時間）…（図3）

図1 登園時間の比較

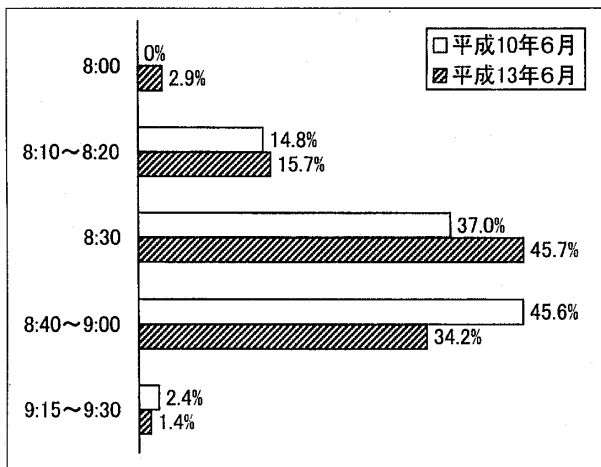
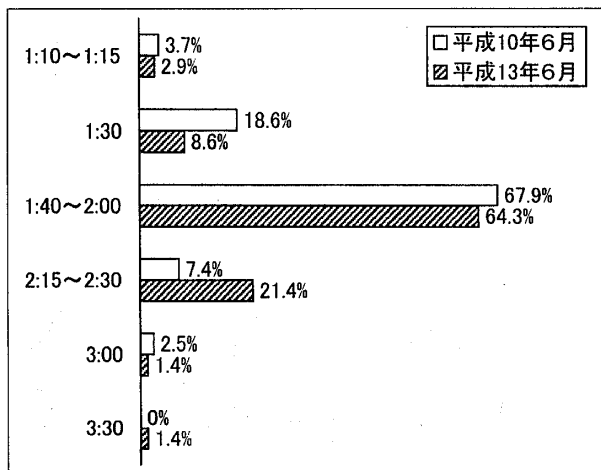


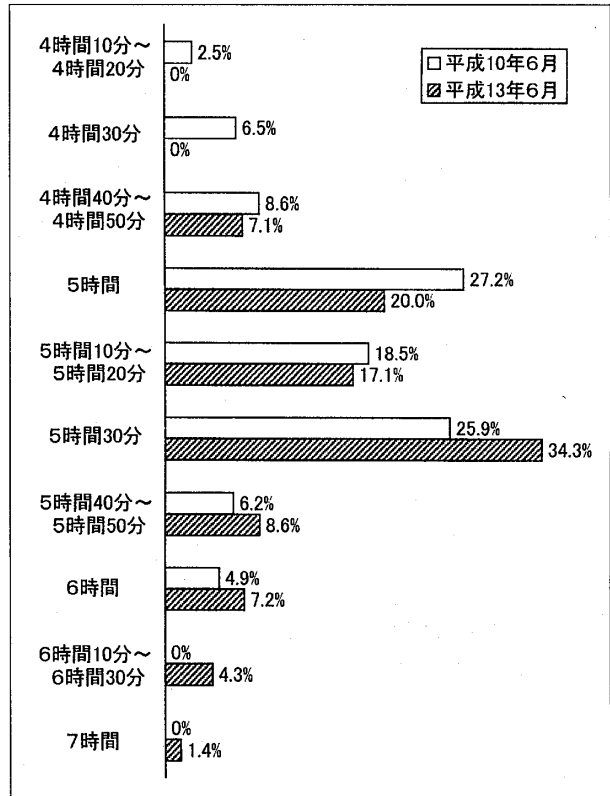
図2 降園時間の比較



以上の結果から一目瞭然、登園時間は早くなる傾向にあり、降園時間は遅くなる傾向が見られた。登園時間は8時30分と8時40分～9時が逆転している。また前回の調査では一園もなかった8時登園が今回の調査では2園あった。また降園時間は1時40分～2時が前回の調査と同様圧倒的に多いが、前回最も遅かった3時より更に遅く、3時30分の園が一園ではあるが現れた。

登園時間が早まり、降園時間が遅くなる状況は必然的に保育時間が延長されたということになる（図3）。

図3 保育時間の比較



これをもう少し時間の幅を持たせてまとめてみると以下の通りとなった。（表1）

《保育時間の比較》（表1）

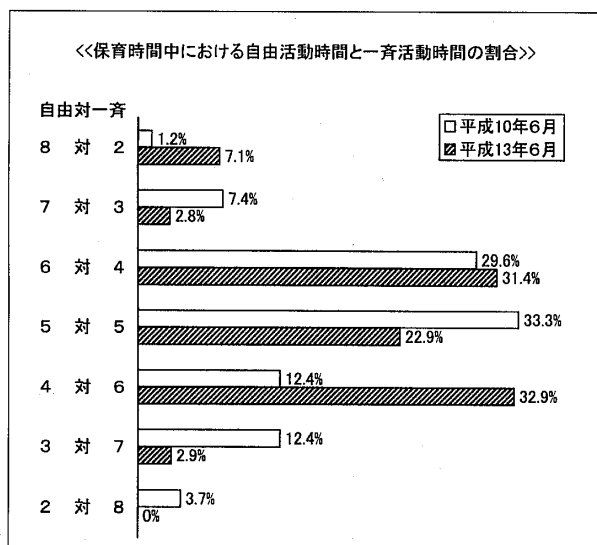
保育時間	平成10年	平成13年
4時間10分～4時間50分	17.6% (14園)	7.1% (5園)
5時間～5時間20分	45.7% (37園)	37.1% (26園)
5時間30分～6時間	37.0% (30園)	50.1% (35園)
6時間10分～7時間	0% (0園)	5.7% (4園)

教育要領にうたわれた「幼稚園の保育時間は4時間を限度とする。」に該当する園は一園もないどころか、保育園なみの長時間保育が行われているところもあることが今回の調査では出てきた。保育園と異なり交代制のない幼稚園の場合、このような状況は、保育者の負担が大きいと危惧する。行政の指導が預かり保育の奨励になっているが、預り保育導入には、別の新たな問題も多い。そこで保育時間の延長で保護者のニーズに応えざるを得ない苦しい現実が窺い知れるのではないだろうか。

2. 保育時間中における自由活動時間と一斉活動時間の比率について

前回の調査同様、一週間の保育時間（午前保育の日を抜かす）を園ごとに平均化し、着替えや昼食時間を除き、自由活動時間と一斉活動時間の割合を出し、平成10年の割合と比較してみた。（図4）

図4 保育時間中における自由時間活動と一斉活動時間の割合



更に(図4)を以下のようにまとめてみた。(表2)

《一日平均の自由時間と一斉時間の割合》(表2)

	平成10年	平成13年
自由時間の方が多い園	38.2%	41.3%
半々(5対5)の園	33.3%	22.9%
一斉時間の方が多い園	28.5%	35.8%

この結果から見ると前回の調査に比較して著しい変化はみられないが、個々の園により開きのあることがわかる。今回の調査でも一日中ほとんど自由遊びの園が一部に見られた。反対にびっしりとタイム・スケジュールが出来上がり、息つく暇のないようなカリキュラム(平成10年には数園あった。)の園は今回の調査では影をひそめた。

3. 自由時間の園児達の活動(遊び)場所について

自由時間、子ども達はどこで遊ぶのか、午前と午後に分けて調査した結果を前回の調査と比較すると次のようになった。(表3、表4)

《自由時間の園児達の活動(遊び)場所…午前》

(表3)

	平成10年6月	平成13年6月
室内・外自由	59.3%(48園)	58.5%(41園)
外遊びのみ	25.9%(21園)	28.6%(20園)
外又は室内	8.6%(7園)	8.6%(6園)
室内のみ	6.2%(5園)	4.3%(3園)
自由時間なし	0%(0園)	0%(0園)

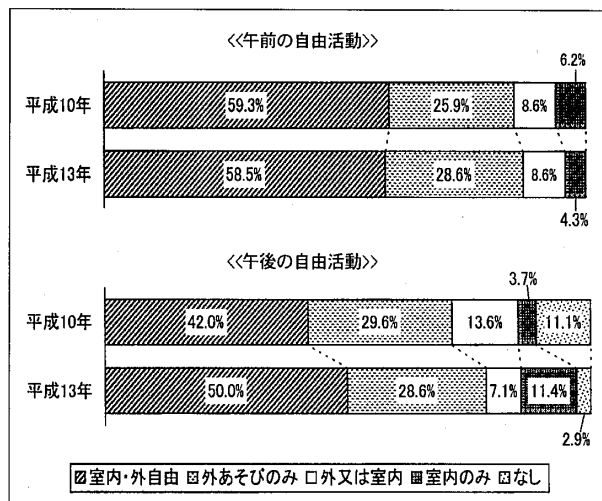
《自由時間の園児達の活動(遊び)場所…午後》

(表4)

	平成10年6月	平成13年6月
室内・外自由	42.0%(34園)	50.0%(35園)
外遊びのみ	29.6%(24園)	28.6%(20園)
外又は室内	13.6%(11園)	7.1%(5園)
室内のみ	3.7%(3園)	11.4%(8園)
自由時間なし	11.1%(9園)	2.9%(2園)

これを図にしてみると以下のようなになる。(図5)

図5 午前と午後の自由活動



午前中の活動場所では、ほとんど差は見られない。しかし午後の方では、室内・外共に自由の園が半数となり増加している。また、前回の調査では、午後の自由時間がない園が11.1%もあったが、今回は2.9%と減少している。つまり、3年間の間に徐々にではあるが、自由時間の活動場所と時間が増加したといえる。保育時間が平均的に長くなっただけ自由時間にゆとりがとれるようになったのではないだろうか。

しかし実習した学生達へのアンケート調査の回答

によれば、自由遊びにもさまざまな制限があるようだ。たとえば、「一斉活動が早く終わった子のみ遊べる」「クラスごとに外で遊べる曜日が決まっている」「午後は時間がなければ遊べない」「年少児は午後の時間は外に出さない」などである。これらの報告は実習生だからこそ把握出来るのであって、なかなか外部からうかがい知ることは難しいであろうと思った。また「基本的には、室内外自由だが、ほとんど外遊びとなっている」という回答も幾つかあり、室内に自由遊びのできる適切で魅力的な環境が整備されていないことを物語っている。

4. 自由活動時の遊びの内容について

自由活動中の遊びの内容を、外遊びと室内遊びに分けて記入してもらった結果は以下の通りであった。なお、複数回答のため園数（カッコ内）で多い順に列挙した。

《外遊び…園庭》

固定遊具（62）、砂場（55）、鬼ごっこ（33）、ボール（25）、乗物（三輪車・一輪車・スクーターなど）（14）、虫捕り（13）、伝承あそび（12）、水遊び（11）、泥んこあそび（11）、ごっこ遊び（9）、縄跳び（7）、ゲーム（6）、リレー（5）、色水（5）、竹馬（4）、動物との触れ合い（3）、木登り（3）、木の実拾い・花摘み（3）、フラフープ（3）、アスレチック（2）、トランポリン（2）、玉入れ・体操・大工・丸太（各1）

外遊びは、前回同様、固定遊具あそび（ブランコ、滑り台など）と砂あそびが代表的遊びである。

6月という時期から見られる特徴の水遊びや虫採り、移動遊具として三輪車や一輪車の導入もある。ごっこ遊びでは鬼ごっこが多く教師の誘導が必要と思われる伝承遊びやゲーム遊びは一部の園に止まっている。ボール遊びは25の園で見られたが、どの程度のボール遊びかまでの把握はできなかった。また動物との触れ合いをしていた園はたった3園である。

全体的にみると、道具依存的保育が多く、保育者の意図的関わりは少ないようである。

《室内遊び…保育室》

ごっこ遊び（ままごと他）（56）、ブロック（47）、

粘土（37）、お絵描き（35）、積木（24）、製作（22）、折紙（21）、絵本（17）、人形・ぬいぐるみ（6）、パズル（5）、玩具（3）、モンテッソーリ教具（3）、楽器（3）、かるた・トランプ（3）、すごろく（2）、電子ピアノ・こま廻し・かくれんぼ・パソコン・OHP・魚釣り・ビー玉・相撲・クッキング・ダンス・文字並べ・スタンプ・手遊び・人形劇・ビデオ・色水作り・小動物（各1）

ままごとに代表されるごっこ遊び、ブロック遊び、粘土あそび、が上位3位までを占めている。これらの遊びも保育者の介入はあまり必要ないであろう。また室内遊びの園ごとの種類を見ると、かなり豊富な教材が準備されている園がある反面、折紙のみ、ブロックのみといった貧弱な内容の園もある。

《室内遊び…ホール》

ボールあそび（6）、功技台・跳び箱（5）、縄跳び（2）、フラフープ・ダンス・車遊び・バー・滑り台・マット（各1）

室内といってもホールの場合は運動あそびとなるようだ。設備上の問題もありホールが使用できるのは、一部の園に限られる。

5. 一斉活動について

指定した一週間中の一斉活動の内容を、造形的活動、音楽的活動、体育的活動、知的活動、その他の5分野の活動に分類して記入してもらった結果は、以下の通りである。

《造形的活動》

七夕製作（37）、お絵描き（24）、父の日製作（13）、折紙（10）、うちわ製作（7）、粘土（6）、壁面や室内装飾（5）、その他の製作（5）、はじき絵（4）、ちぎり絵・貼り絵（3）、お店やさんごっこ作品作り（3）、染め紙（2）、野菜スタンプ（2）、フィンガーペインティング・デカルコマニー・大工遊び・敬老の日プレゼント作り・誕生会プレゼント作り（各1）

《音楽的活動》

楽器（メロディオン・ピアノ・ハーモニカ・カスタなど）・合奏指導（23）、歌唱指導（21）、リ

トミック (18)、リズム遊び (7)、鼓笛隊 (5)、盆踊り (3)、遊戯 (1)

《体育的活動内容》

体操 (29)、水泳・プール (20)、マット・跳び箱・平均台などの指導 (17)、鉄棒 (5)、運動会練習 (リレー・かけっこ、など) (4)、ボール遊びゲーム (2)、水遊び (2)、剣道・竹馬・マラソン (各1)

《知的活動》

平仮名文字練習 (16)、ワーク・ブック (8)、数指導 (7)、英語・英会話 (6)、SI あそび (知能訓練) (5)、フラッシュ・カード (2)、コンピューター (2)、漢字絵本 (2)、習字・恩物・詩・そろばん・俳句・国旗 (各1)

《その他の活動》

栽培 (田植え・なす・トマト・枝豆・大根・綿などの栽培、じゃがいも掘り) (30)、料理 (12)、動物の飼育 (3)、絵本 (2)、劇遊び・交通安全指導・ゲーム遊び・パーティー・掃除・地引網・座禅 (各1)

以上の通り、造形、音楽、体育などは定番の活動が多いが、知的活動で文字や数の一斉指導が徐々に増加する兆しが見える。また英語・英会話指導も今後ますます増加することが予測される。その他の活動で栽培が多かったのは季節的なものであろう。料理なども新しい保育活動として最近導入されるようになってきたようだ。

総合して列挙すると、かなり多方面の分野の活動が幼稚園に導入されているが、園による偏りが多く、新しい生活的活動 (料理・掃除・栽培など) を積極的に取り入れている園と、ワーク・ブックなどによる知育活動を一斉的に指導する保育 (教育要領の意図が活かされていない) も健在である。

6. 自由活動時間中の保育者の関わり

前回の調査では出来なかった自由活動時間中の保育者の様子を実習生を通して探ってみた。質問項目は以下の3項目である。

①子ども達の自由に任せている。保育者は危険の

ないように見守る程度。

②自由に遊ばせているが、必要に応じて、遊びの紹介や援助をしている。

③その他 (具体的に書いてください。)

以上の問いに対する結果は次の通りであった。

①の見守る程度 … 22.9% (16園)

②の援助ありの園… 60% (42園)

①も②もありの園… 15.7% (11園)

③その他 … 0% (0園)

無回答 … 1.4% (1園)

この結果から見ると、約76%の園では、状況に応じ必要な援助や遊びの紹介が行われている。しかし、放任状態の自由遊びの園も約23%あるということは問題を感じるのである。ただ実習生の目からの意見であるから、そのことを加味して判断しなければならないと思う。

7. 外部講師について

パソコンや英語などの導入が増えれば、必然的に外部から専門の非常勤講師を採用せざるを得なくなるのではないかと思い、その実態についても調査してみた。結果は以下の通りである。

外部講師のいる園 … 67.1% (47園)

外部講師のいない園… 32.9% (23園)

外部講師のいる園が、いない園の約2倍であった。

また、外部講師のいる園 (47園) に何の講師を採用しているか調査した結果は以下の通りである。
(複数回答)

体育…31、英語・英会話…14、水泳 (プール) …7、造形・絵画…7、音楽・合奏…6、リトミック…5、リズム体操・エアロビ…3、パソコン…1、習字…1、

では、一園で何人 (何種類) の外部講師を採用しているのだろうか。

2人 (分野の異なる講師) 以上採用している園は、次の通りであった。

・2人 (2分野) の講師がいる園… 17園

・3人 (3分野) の講師がいる園… 5園

・ 5人（5分野）の講師がいる園… 1園

ちなみに5人の講師がいる園は、体操・水泳・造形・英語・コンピューターの各講師だった。年間を通しての体育講師とは別に、季節柄、市民プールなどに出向き、専門のインストラクターから指導を受けている（主に年長児）という事例も幾つかあった。

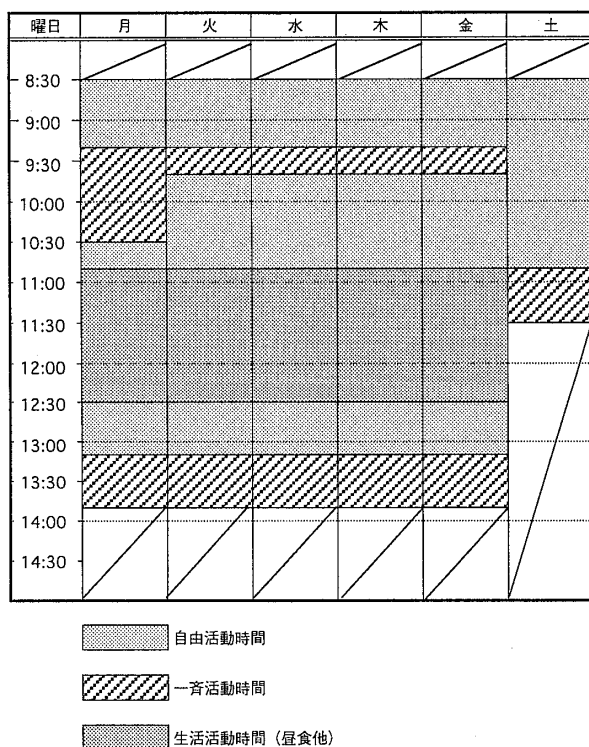
いずれにしても、専任の教諭が不得意な分野に講師を依頼するケースが多いといえる。

8. タイムスケジュール（一週間）の事例

幼稚園の時間割は、小学校と異なり一定していない。登園時間にも幅があり、登園した子から順次自由活動に入り、全員揃うのを待つ形態が多い。昼食時間や降園時間もまちまちである。以下に4つの園の事例を挙げ比較してみる。

A 幼稚園の事例（図6）

図6 A 幼稚園（自由活動の多い園）

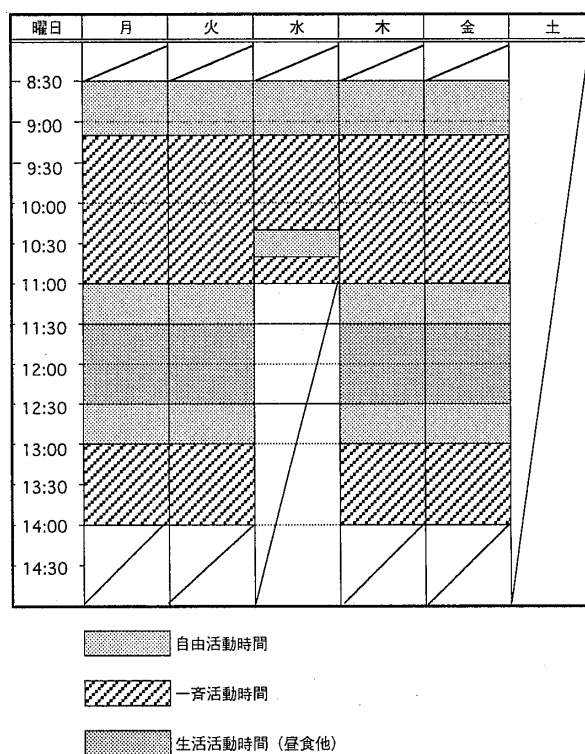


地方の市立幼稚園で園児数は100名以下。基本的に一日中自由活動である。室内外自由で外あそびの内容は、砂遊び、固定遊具、かけっこなど。室内では、粘土、廃品を使った製作、お絵描き、ままごと、積木など、教材コーナーや玩具コーナーで自由

に遊べる。一斉に活動したのは月曜日に、父の日の準備でお父さんの顔を描いたのみである。後は、降園時の集合で歌を唄う程度。昼食時間（準備、片付けを含む）が一般の園に比べかなり長い。早くに食べ終わった子から再び自由活動になるようである。このような園は地方の公立園に共通している。（平成10年の調査でも同じような結果であった。）

B 幼稚園の事例（図7）

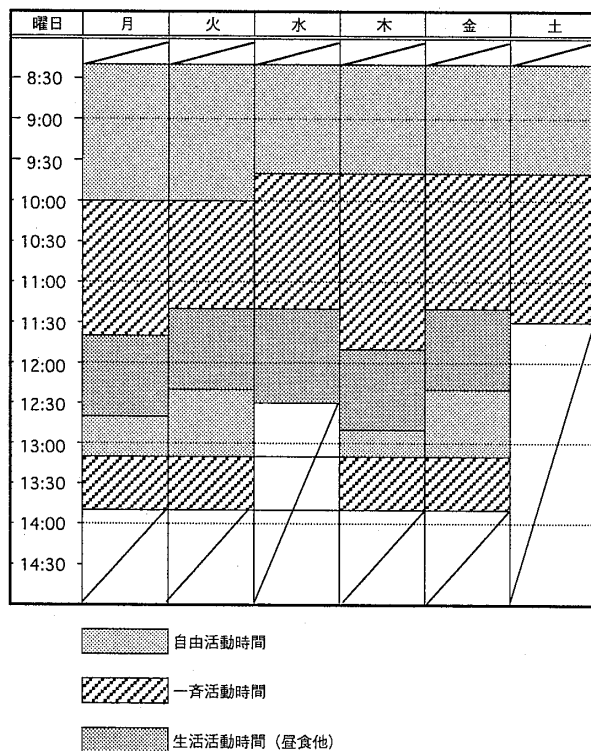
図7 B 幼稚園（一斉活動の多い園）



東京の私立幼稚園（宗教法人立）で園児数200名弱。登園開始から全員が揃うまで室内外自由。外あそびでは砂場、固定遊具、ボール、など、室内では粘土、積木、ブロック、絵本、お絵描きなど。9時20分にホールに全員集合して約20分間宗教的保育が毎日行われる。その後クラス別に、鼓笛隊の練習、跳び箱・組体操などの体育、英語、コンピューター、ワーク・ブック、栽培、などの主活動が約1時間半（水曜日は1時間弱）行われる。その後の自由活動時間は、主活動の内容により短くなったり長くなったり、場合によってはなくなったりする。体操・水泳・造形・英語・コンピューターは、外部講師による。

C 幼稚園の事例（図8）

図8 C幼稚園（特徴のある園①）

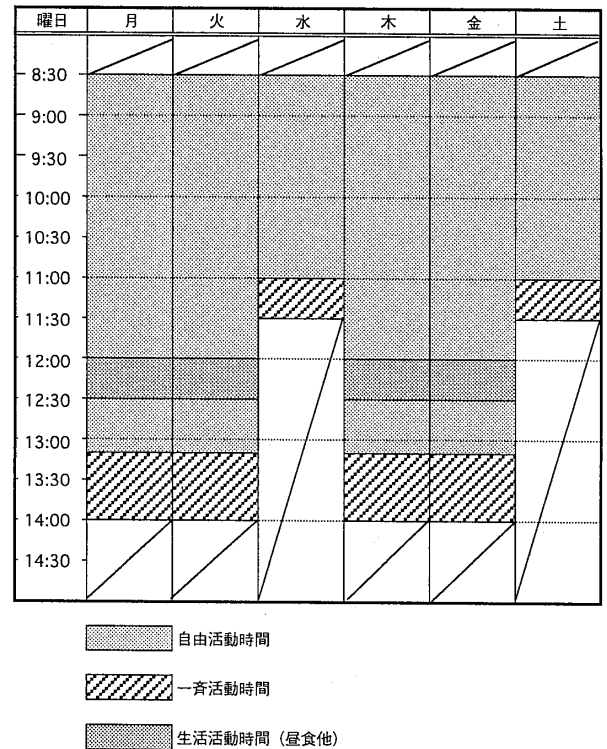


東京の私立幼稚園で園児数は300名以上。午前中の一斉活動は、プール・フォークダンス・製作活動など30分から45分間隔で3種から4種の課題活動が行われている。また特徴的なのは、外あそびは週3回位、曜日が決まっていいて他の日は室内遊びとなることである。園児数が多いためこのような方法を取り入れているようである。外遊びはほとんど固定遊具で、教師は遊びには参加せず危険のないように見守る程度である。室内遊びは、ブロック・積木・ままごと・絵本のいずれかである。外部講師は3人で、英語・絵画・音感教育が指導されている。その他の課題としては、文字練習が一斉に行われている（年長）。課題活動が多いため昼食時間が一定していない。昼食は全て給食。

D 幼稚園の事例（図9）

東京郊外の私立幼稚園で園児数250名。最終バスの到着は9時45分頃で昼食時間までずっと外遊びである。（雨天以外）昼食後もほとんど外遊びである。遊びの内容は、泥んこ遊び、水遊び、鬼ごっこなど

図9 D幼稚園（特徴のある園②）



あまり種類は多くない。雨天などで室内の場合は、折紙か玩具遊びである。降園前の45分間に簡単な製作活動があるらしい。週一回位体操をする時もあるが時間は一定していないようである。3週間の実習期間中、ほとんど音楽活動はなかったという。

なおこの園は、保育終了後（2時以降）、希望者にはサッカー・新体操・造形指導などの課外保育が行われている。

以上4園の事例を紹介したが、自由活動は計画的に環境構成をしないと、単なる野放し状態となる危険がある。幼稚園は安全性を保障した単なる遊び場であってはならない。

D幼稚園の子どもたちは、確かに長時間思いっきり遊び、それなりに学ぶことも多いであろうが、課外で保育の欠落部分を補うのは、本末転倒の感がある。

VII まとめ

1. 平成10年との保育時間、保育空間等の比較について

3年間の推移で最も特徴的な変化は、登園時間が

全体的に早まり、降園時間は遅くなったことである。従って保育時間も延長され、全体の約半数が5時間30分から6時間保育とになっている。保育者の負担が大きくなったとも言えるが、自由という名の放任保育も増える可能性がある。保育所と異なり、昼寝やおやつが含まれない幼稚園では、幼児の健康上も問題であろう。今回の調査で1園昼寝を導入している園もあったが、設備の点でも今後検討しなければならないであろう。

次に保育内容については、空間面では大きな変化はなかった。自由時間と一斉時間の比率でやや一斉時間が増えているが、前回と今回の調査園の約半数は学生の自己開拓園など同一園ではないため、言及は避けた。

前は自由時間の遊びの内容を数値的に出さなかったが、今回は各園の実態を園庭と保育室、ホールに分け調査した。園庭（外あそび）は、固定遊具と砂場が圧倒的に多く、室内ではままごと、ブロック、粘土など道具依存の活動が多い。保育者の「環境を計画的に変化させ」「子どもたちと共に作っていく環境」などの教育要領の意図を実現するのは難しい現実があるように思われる。

一斉活動の調査では、知的活動の項目において、文字や数の一斉指導が目立つ。豊富な自由活動時間にこれらの教材も準備して、個々の幼児の発達段階や興味に合わせた工夫をすることが、今後の各園の課題であろう。

2. 保育者の子どもへの関わりについて

自由時間に保育者は前述のように子ども達が遊具や教材を使用して遊んでいるとき、どのように関わっているのか、に対する評価は、「怪我やけんかのないように見守る程度であまり介入しない」という園が4分の1程度あることがわかった。短時間の場合（昼食後など）ならいざ知らず、午前中長時間の自由保育においては、十分な環境設定や保育者の必要に応じての積極的参加も必要ではないだろうか。自由時間の保育者の行為に模範となるような実践を期待したが、そのような場面は把握できず大変残念なことである。

3. 非常勤講師の採用実態

前回はこの件については、調査しなかったため比

較はできないが、英語・英会話の講師が増加傾向にあると思われる。ちなみに外国人講師を採用していたのは2園である。小学校に英語が導入されれば英語講師は今後増加することであろう。パソコンの導入による外部講師の導入は1例しかなかった。こちらでも今後増加傾向が予想される。

4. タイム・スケジュールの事例から

幼稚園のカリキュラムは、かなりバラエティーに富んでいる。市立幼稚園（含、町立）は自由時間をたっぷりとり、その中でさまざまな経験を積みせようと努力している姿勢がある程度読み取れる。しかし適切な集団の規律や礼儀面の指導は弱いように感じた。反対に私立幼稚園の場合、設立母体も学校法人立、宗教法人立、個人立と3種類あり、特に宗教法人立では、仏教園やキリスト教園で宗教的保育の内容が異なる。また自然の環境に恵まれ、木登りや栽培・収穫などの経験が出来る園は遊びっぱなしでも子ども達の豊富な経験はある程度満たされ、保護者からの人気も高いようであるが、そのような環境に恵まれない園では何か目玉保育を持たないと園児獲得に影響が出る。遊びを重視する保育にして、課外で一斉的保育をするような園、あるいは専門分野の講師を多くして保育の質を上げようと努力する園など、本来の目的からズレていく園も出てくるといえる。経営責任者の保育理念が問われる難しい問題である。

VIII おわりに

今回の調査は学生達の実習直後に行ったため、かなり詳細な報告を聞くことが出来た。単なるアンケート調査では知ることの出来ない個々の幼稚園の実態を3週間の実習を通し観察した結果の報告である。従って、時間・空間面の報告は信頼できると思う。しかし保育者の姿勢については、保育者の行為を通しての観察しかできず、子ども達の内面の変化や保育者の意図は掴みきれない。教育要領の目指した「応答性のある環境構成」について把握することの限界を感じたのである。また、調査を整理してみて、預り保育の実態も一緒に調査すべきだったと後悔している。

いずれにしても現在幼稚園に課せられた問題はあまりにも多い。幼稚園の保育所化現象に現場は戸惑

いながらも少子化の中で、サービスを色々と模索しているようである。本来の幼児教育が、働く女性支援の影で薄くならないことを祈りたい。

IX 引用・参考文献

《引用文献》

- 1) 天野珠子「保育形態と幼稚園の生活」駒沢女子短期大学研究紀要 第33号 2001.3
- 2) 小田豊・神長美津子編著「新幼稚園教育要領の解説」第一法規 1999.8.30 P.11
- 3) 2) に同じ
- 4) 1) に同じ
- 5) 1) に同じ
- 6) 1) の資料1 参照

《参考文献》

- (1) 文部省「幼稚園教育要領解説」フレーベル館 1999.6.15
- (2) 河野重男編著「新しい幼稚園教育とその展開」チャイルド社 1989.6.1
- (3) 天野珠子「保育形態と幼稚園の生活」駒沢女子短期大学研究紀要 第33号 2001.3.

以上